

一粒かきの稚貝育成に適した籠

かき養殖研究チーム

H18～20年度に実施した「一粒かき養殖の定着化技術開発研究」のフォローアップ研究として、一粒かきの籠養殖技術について確認試験を行っています。品質工学的な手法を取り入れて最良との結果が示された籠、観察の容易さや出し入れ等の作業性が良く、上面開口型で浮揚性の籠（現場での普及を想定）、さらにオーストラリアのカキ養殖業者の間で普及している樹脂製でパイプ状の籠の3種類について、使いやすさ、値段、生産性の面から評価をしています。今年のチームは新たにベテランが加わり、新しい視点で試行錯誤をしながら、新たな展開を目指しています。



写真：試験に使った籠

左上：品質工学による最良籠

右上：オーストラリア普及籠

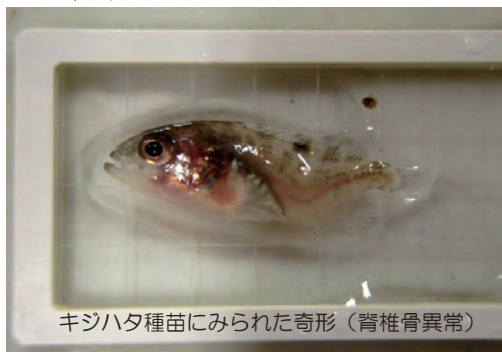
左下：従来の提灯籠

右下：作業性の良い上面開口型籠

キジハタ種苗生産の新たな課題

地付き魚生産チーム

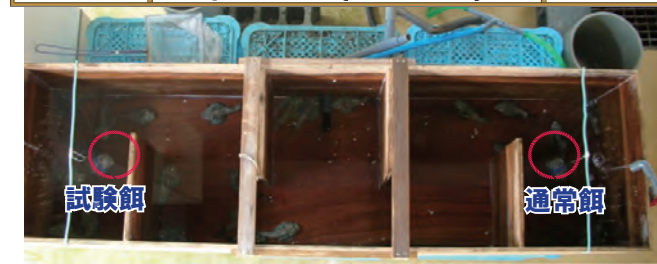
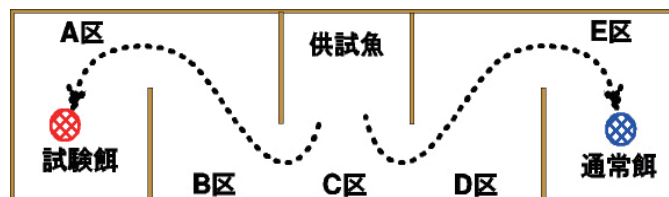
地付き魚生産チームでは7月7日に（独）水産総合研究センター玉野栽培漁業センターよりキジハタの受精卵を受け入れ種苗生産技術開発に取り組みました。今年度は脊椎骨の異常が認められる個体が多く発生し、奇形率は42.6%を占め、難しい種苗生産となりました。海産魚類の奇形発生の原因については様々な説がありますが、今回のような事例は技術開発を行う上で重要な知見になると考えられます。今回生産した種苗の奇形発生部位と発生状況を整理し、原因の究明に今後取り組みたいと考えています。



キジハタ種苗にみられた奇形（脊椎骨異常）

漁獲されたオニオコゼの蓄養技術の確立に向けて、身やせやへい死の原因となっている「人工飼料に餌付かない」問題を解決するため、「よく食べる餌」の開発に取り組んでいます。課題の一つが、オニオコゼが餌を食べたい気持ちになるような「摂餌誘引性」を餌に持たせることで、写真のような実験装置を用いてオニオコゼがどのような香りの餌に誘われるのか調べる実験を行いました。

実験は5区画に区切った迷路状の構造の水槽の、中央部の区画に25尾のオニオコゼを収容して開始します。その後、水槽の左端（あるいは右端）に吊るしたかごに入れた香り付きの餌に向かうか、あるいは反対側に設置した普通の餌に向かうかを調べます。しかし、最初の試験ではオニオコゼが動いてくれず、うまくいきませんでした。この失敗は日中に試験を行っていたためで、オニオコゼは夜間に活動するという習性を考えていなかったためでした。いわゆる「潮が悪い」時には魚が釣れないような状況です。この反省からオニオコゼの活動時間の夜の試験に再挑戦しています。研究員にとっては眠い目をこすりながらの試験になりますが、懐中電灯を片手に奮闘しているところです。



写真：水槽実験の様子。

A区からE区の5区画のうち、最初、中央のC区画に収容したオニオコゼは、時間の経過とともに左右の各区画に移動している。

赤潮・魚病の発生状況

危機管理チーム

有害赤潮プランクトンの発生については、東部海域において6月末にシャットネラ赤潮が発生し、赤潮警報が発令しましたが、大きな被害は見られませんでした。

魚病については、特に目立った疾病の発生はありませんでした。KHV病の発生は、個人池において1件確認されましたが、感染の拡大は確認されませんでした。